

「自ら適切に判断できる力を育てる健康教育」

～ 創傷の治癒過程について見通しをもち主体的に学ぶ保健指導の工夫 ～

健康教育研究会議

研究員 加藤木 藤子 (川崎市立坂戸小学校) 吉原 緑 (川崎市立下布田小学校)
猪狩 和子 (川崎市立長沢中学校)

指導主事 後藤 美智子

I 主題設定の理由

平成 20 年 3 月に告示された新しい学習指導要領が、平成 23 年度より小学校で全面実施される。今回の改訂でも「生きる力」の理念は継承され、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の育成が望まれている中で、各学校では実施にむけて準備を進めながら教育活動が展開されている。健康教育においてもこれからは更に、平成 21 年 4 月に施行された学校保健安全法とともに新しい学習指導要領の理念を踏まえた取組が重要となる。

そのような時代の背景も踏まえながら、今年度の研究会議でも研究員の所属校での状況を協議することから研究を進めた。

まず始めに、各研究員が所属する学校の保健室に来室する子どもたちの様子を話し合った中で共通していることがあった。一つめは、保健室の来室理由で、けがによる外科的な来室者が多いことであり、二つめは、その中でもけがの種類ではすり傷や打撲がそのほとんどを占めていることであった。三つめは、けがや体調不良が起きた時に他人まかせにして、自ら考え対処しようとしにくい傾向があることが挙げられた。

次に健康教育の実施では、保健学習の時間はもとより特別活動などの時間等を活用し、様々な工夫を凝らして子どもの実態に合わせた指導を行っている状況があった。指導方法としては、実験や体験活動を取り入れながら子どもたちの学びを深めている工夫がみられ、子どもの意識が変わり、適切な行動につかながっているという報告があった。このように、実験や体験活動を取り入れたり、調べ学習を行ったりすることで健康の価値を高め、適切な行動選択ができるような授業が行われている。

しかし、保健学習において学んだ授業の内容を自分の生活に活かし、自ら実践していくまでには至っていないのではないかと意見が出された。特に小学校 5 年生「けがの防止」や中学校 2 年生「傷害の防止」において学んだだけの簡単な手当や応急手当では、子ども自身が自分の体の中で何が起きているのかといった深い認識をもって、それを行っているわけではないと感じる。

自ら考え対処しようとしにくい傾向の理由を協議していく中で、自分の体の中で何が起きているのかといった深い認識をもっていないことや自分の体の状態が順調に回復していくのか、回復していかないのかという創傷の治癒過程に見通しがもてないことが理由としてあるのではないかと意見が出された。

そこで、自分の体の中で何が起きているのかを認識し、創傷の治癒過程の見通しをもち、けがの状態に応じた対処方法を自ら適切に判断し、対処していこうとする力を育てていくことが大切であると考え、本研究会議の主題を設定した。

II 研究のねらい

創傷の治癒過程について見通しをもち主体的に学ぶ場を設定した保健指導を実施し、創傷の状態を自ら適切に判断し対処できる力が育つこととの関連を明らかにする。

なお、授業モデルの作成では次のような目標を設定し、保健指導の工夫を検討していくことにした。

- 1 自分の生活経験から創傷の治癒過程を振り返り、体への関心を高める。

- 2 創傷時の体のしくみとはたらきを理解し、創傷の治癒過程に見通しをもつ。
- 3 創傷の状態に応じた適切な対処方法を判断し、実践しようとする。

Ⅲ 研究内容

1 研究の手順

- (1) 研究員の各校における子どもたちが抱える健康課題とその解決方法を探る。
- (2) 各校で実践している健康教育の成果と課題を整理する。
- (3) 研究主題にそった内容で実践している健康教育や先行研究を調べる。
- (4) 保健学習と関連を踏まえて授業モデルを作成する。
- (5) 授業モデルを実施する。
- (6) 検証授業の結果をまとめる。
- (7) 研究の成果と課題を整理する。

2 授業モデル作成の工夫点

保健指導の目標を達成させるために次のことを協議し、授業モデルを作成した。

(1) 保健学習と関連させた保健指導の内容および対象学年の検討

研究主題に迫る保健学習の内容は、小学校5年生体育科保健「けがの防止」、中学校2年生では保健体育科保健分野「傷害の防止」であると考えられる。その学習では、けがの様々な要因と防止および創傷の適切な応急手当の知識や理解を深めている。

日頃の学校生活の中で、保健学習で学んだ応急手当を進んで行っている姿も見られるが、保健室に来室する子どもたちは、保健学習で得た知識が活用されていないと感じる場面も多くある。そのため、保健学習で得た知識をさらに活用できるものとなるような保健指導の展開が必要であると考えた。

そこで、保健学習の内容を踏まえながら、身近である創傷を保健指導で取り上げることとした。

対象学年の検討においては、各学校での来室者の状況に差がみられたものの保健学習の内容と関連させて指導をしていくことが有効であると考え、小学校5年生と中学校2年生を対象とした。

(2) 創傷の治癒過程について見通しをもち主体的に学ぶ場の設定

保健学習ではけがの適切な応急手当を学ぶが、創傷の治癒過程について科学的な理解を図ることは難しい現状があり、なぜ応急手当を行うのかといったことと実践への結びつきが薄いと考えられる。そこで、実践に結びつける手立てとして創傷の治癒過程について見通しをもち主体的に学ぶ場を設定することとした。具体的には、自分の生活体験から創傷を振り返る、創傷の治癒過程を予想する、創傷の治癒過程を知るといった学習活動の場において創傷の治癒過程についての見通しをもたせることにした。その中で、自分が考えたことや友だちと話し合ったことをワークシートに表現することで、治癒過程のみならず判断や対処方法も一時間の授業を通して意識させていくことにした。

(3) 体のしくみやはたらきの理解を深め、自ら適切な判断と手当ができる教材の作成

教材の作成にあたっては、創傷の受傷から治癒までの治癒過程を自分の生活経験をもとに振ること、創傷時の体内のしくみやはたらきを視覚的に理解できること、治癒過程の見通しをもち予想させること、保健学習で学んだ応急手当の必要性と今までに学んだことの関係を見つめさせるように工夫をした。なお、その際に各学校に導入されている50インチテレビや教材提示装置等のICTを積極的に活用することにした。

3 検証授業

- | | | |
|----------|--------------|----------------------|
| (1) 実施校 | 研究員所属校 | 3校 (小学校2校 中学校1校) |
| (2) 対象者 | 小学校5年生 | 合計 65名 |
| | 中学校2年生 | 合計 34名 |
| | | 合計 99名 |
| (3) 時期 | 平成22年11月～12月 | (計3回) |
| (4) 実施内容 | 特別活動 | 学級活動 (2) |
| | 小学校 | カ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成 |

中学校 キ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成

(5) 題材名 「なぜ、けがは治るの？治るしくみを知っている？」

(6) 授業形態 担任（T1）と養護教諭（T2）のチームティーチングで実施

(7) 授業のねらいと評価

①授業のねらい：すり傷や打撲の治るしくみを知ることにより、けがの程度や状態にあった手当を適切に判断し、対処方法を自ら実践しようとする態度を育てる。

②評価規準

活動への関心・意欲、問題への気づき	集団の一員としての（自己の生き方についての）思考・判断	自主的・実践的な活動・態度
すり傷や打撲の治るしくみや過程に関心をもち、自分でできる手当をしていくことの大切さに気づいている。	すり傷や打撲の治るしくみを知り、自ら適切な手当を判断している。	すり傷や打撲の程度や状態に応じた自分ができる手当を実践しようとしている。

(8) 打撲（小学校）の実践

【指導内容】 □内は、子どもの学習活動を示す。

導入 保健学習の振り返り、本時の学習内容を知る

保健学習で学習したけがの防止「けがの手当」を振り返り、本時の学習内容を確認した。

展開1 自分の打撲時の経験から治るしくみに関心をもつ

自分の打撲時の経験を思い出して治っていく過程を考えさせ、ワークシート1の横に並べた4つの枠に自由に記入させた。また、打撲時の特徴としては、色の変化もポイントになるので色鉛筆などを使用することも勧めた。その後、教材提示装置を使用し、50インチテレビで記入した内容を提示し、自分の打撲後の経験から治癒過程の見通しや仮説を3～4名に発表させた。

展開2 打撲の治るしくみや過程を考え、予想をしてからグループで意見交換を行う

誰もが経験していると思われることを話し合う場を設け、3～4名に発表させた。

展開3 打撲が治るしくみを理解する

養護教諭が50インチのテレビを活用し、打撲の治癒過程を図式化し視覚的にわかりやすくした。子どもが打撲の治癒過程を理解しやすいように、専門用語やわかりづらい表現は避け、より身近な言葉を使い、より簡潔に伝える工夫をした。

終末 本時のまとめをする

「学んだことをこれからの生活にどのように生かしていきたいのか」をワークシート3に記入させ、まとめた。数名の子どもに発表させ、他の人の意見も参考となるようにした。

(9) すり傷（小・中学校）の実践

【指導内容】 □内は、子どもの学習活動を示す。

導入 保健学習の振り返り、本時の学習内容を知る

保健学習（小）けがの防止「けがの手当」、（中）傷害の防止「応急手当」の内容を振り返り、本時の学習内容を確認した。

展開1 自分のすり傷の経験からその治癒過程を考える

自分が経験したすり傷を思い出して、受傷から治癒までの経過をワークシート1の横に並べた4つの枠に自由に記入させた。（小学校の1校では、1つめの枠にあらかじめ膝の絵を提示した。）

ガーゼや包帯などのすり傷を保護している事例を記入する際は、すり傷の様子も考えながら記入するよう教師が支援をする。

展開2 隣の人と自分の記入したものを発表し合う

（小）隣の人と自分が記入したものを発表し合う。

1～2名の代表者が教材提示装置・50インチテレビを使い発表させる。

教師は、発表した内容を板書で整理する。けがの程度や



状態から、各自の手当や治りに違いがあることに気づくよう支援をする。

展開3 すり傷が治るしくみや過程を考える

どのように傷が治っていくかを考えながら予想し、ワークシート2に記入することで、すり傷の治るしくみに関心をもつことができるように支援する。

前後左右で相談しても良いことやイメージにつながるようなヒントを示し支援する。

記入したワークシート2を2～3名が発表し、その内容を板書しながら整理させる。

展開4 すり傷が治る体のしくみと経過の資料を見ながら理解する

養護教諭が、50インチテレビでパワーポイントを使い、すり傷が治るしくみと過程を説明する。

- ①血が出る ②血が止まる ③透明な液体が出る ④かさぶたができる ⑤かさぶたが剥がれる
⑥応急手当

展開5 自分や友だちのすり傷の経験からすり傷の治る過程で適切に判断するポイントに気づく

(小) すり傷が治る過程で、順調な経過をたどっていないと判断するポイントやその時の対処方法を考えさせる。

(中) すり傷が治る過程で、起こる可能性のある状態をグループで考え、カードに記入させる。

カードを黒板に掲示し整理することで、判断のポイントを理解させる。

終末 本時のまとめをする

本時の内容を振り返らせ、これから自分の生活に活かしていくことをワークシート3(小)、ワークシート4(中)に記入させる。

(10) 検証授業の評価

小・中学校ともに「本時のまとめ」の時間でワークシート3(小)、ワークシート4(中)に「今日の授業でこれからの自分の生活でいかしたいことやけがをした時にどうしていきたいですか?」について記述させた。その記述内容をカテゴリー別に整理し、分析した。

また、授業前と授業後にとった自己評価票についても比較し、子どもの変化を見ることにした。

①小学校「打撲」授業から

ワークシート3に記述では、「自分で手当をしていきたい」「まず、冷やす」という打撲の程度の状態に応じて自らできる手当を実践しようとする態度について記述している子どもの記述が多くみられた。続いて、「打撲が治るしくみがわかった」打撲の治るしくみや過程に関心をもつことの記述で、その次は「状況を見て判断していきたい」「程度によっては大人に相談する」といった自ら適切に判断していこうとする記述であった。

また、自己評価票では「1 けがをしてから治るまでけがの様子を見ながら自分でできる手当をしようと思いませんか?」および「3 打撲をした時に自分で判断した手当ができそうですか?」については事前よりも事後に「いいえ」が減り「はい」の回答が増えているが、「2 けがの応急手当をする、大人に相談する病院へ行くなど打撲の状態を見て自分で判断することができそうですか?」については事前よりも事後に「どちらともいえない」との回答が増えていた。

②小・中学校「すり傷」授業から

小・中学校ともに傷口を「水でよく洗う」「消毒する」などのすり傷の程度や状態に応じて自らできる手当を実践しようとする態度について記述している子どもが半数近くを占めていた。続いて、「傷が浅いか深いかよく見る」「自分で傷の状態を見てから動く」といったけがの程度や状態に合った手当を適切に判断するといった記述と「自分で判断できるようになりたい」という目標を立てている子どももいた。少数ではあるが「傷口がかゆくなったり、ムズムズしたりする原因がわかった」「自分の血液がケガを治してくれる」「どのようにしてケガが治るのかわかった」といった傷の治るしくみを知ることができたという記述もみられた。

また、自己評価票では「1 けがをしてから治るまでけがの様子を見ながら自分でできる手当をし

ようだと思いますか?」「2 けがの応急手当をする、大人に相談する病院へ行くなどすり傷の状態を見て自分で判断することができそうですか?」「3 すり傷をした時に自分で判断した手当ができそうですか?」のすべてにおいて事前よりも事後に「いいえ」が減り「はい」の回答が増えていた。

IV 研究のまとめ

創傷の治癒過程について見通しをもち主体的に学ぶ保健指導の工夫と子どもたちが自ら適切に判断できる力との関連について、本研究を行ってきたことから見えてきたことをまとめた。

展開1「自分の生活経験を振り返りながら、創傷の治癒過程や判断したこと、対処方法を考える」場において創傷の生活経験を振り返ることは、創傷の経験の有無にかかわらず見通しを立て治癒過程に目を向ける活動になっていた。しかし、中学校2年生では創傷の経験の記憶が薄れている子どもや創傷の経験のない子どもにとって、創傷の治癒過程を予想することは難しかったようである。ただし、この場面で子どもたちの話し合いを入れることにより、創傷の治癒過程を考えてその状態や応急手当をワークシートに表現することができていた。打撲では、自由な表現で描いていけるよう4つの枠を空欄としたが、けがの状況や皮膚の色の変化、腫れの様子もしっかりと記述することができていた。すり傷も打撲と同様に手当を含めて絵と文字で表現したり、治癒するまでの具体的な日数も含めて振り返ったりしていた。また、代表の子どもが自分の書いたものを教材提示装置で発表することにより、自分が考えて書いたものと比較することができていた。この場面では、自分の打撲やすり傷を経験したことや自分では経験がなくても様々な生活経験から考えたことを書く、発表をする、友だちの考えを聞くといった活動により、治癒過程を意識し、判断したことや対処方法を深く考えることができていたと言える。

展開2「創傷が治るしくみを予想しながら、創傷の治癒過程を考える」場において創傷が治るしくみを予想することは、子どもたちが今までに習得してきた知識と経験を活用する活動となっていた。小学校の授業の中では、家庭や図書室で以前に学習したことがある子どもたちが中心となり知識を活用しながら、説明をしようとする姿がみられた。その他、友だちの意見をヒントに新しい考えが浮かんできたり、友だちと一緒に活発な意見交換をして予想している場面も見られ、すり傷や打撲が治るしくみに興味をもっていただけると言える。また、ワークシートの記述では、打撲後の皮膚の色の変化や血管について着目している子どもたちが多く、すり傷では、受傷後に出血した時のしくみを考えている子どもたちが多くみられた。その他、打撲、すり傷ともに白血球のはたらきを記述しており、すり傷では血液の成分の名称を具体的にあげ、「かさぶた」に着目して、治るしくみを考えようとしている子どももいた。このように、治癒過程について部分的に正しい知識をもっていたり、血液の成分が治るしくみに関係していることは予想できたりしていた。しかし、単語だけが一人歩きして治癒過程と関連した知識になっているとは言えない。

中学校の授業でも曖昧な知識を理科の教科書を見ながら確認をしたり、今までに学習したことを思い出そうとしたりしていた。小学校のように友だちと相談するといった姿は少なかったが、自分の力で予想をしていこうとする姿が多く見られた。中学校のワークシートでは、血液の中の成分のはたらきと皮膚の再生について記述している子どもがほとんどであった。また、かさぶたの下で新しい皮膚が再生することなど、「かさぶた」という言葉を用いた記述が多くあった。この場面では、創傷の状態に応じた判断や対処方法を十分に意識しているとは言えないが、皮膚の色の変化、内出血の状態、血液のはたらきとかさぶたに着目しながら、治癒過程を認識していたと考えられる。さらに、体のことを詳しく知りたいという興味をもち、体の外側だけではなく内側にも目を向けられるようになったと言える。

展開3、4「創傷の治癒過程を知り、判断する視点や対処方法を考える」場においては、創傷の治癒過程の正確な知識の定着を図り、自分で判断しようとする意欲を高める活動となっていた。この場面では、創傷の治癒過程を理解しやすくするために50インチのテレビを使用し、パソコンで作成した画像を見せながら説明をした。その後、創傷の治癒過程をみながら判断し対処していく重要性を指導

した。創傷の治癒過程を 50 インチテレビの大画像でみることにより、自分の体の中で起こっていることをイメージしながら、体のしくみやはたらきに関心をもって聞いていた。視覚的な教材は、体の不思議さや大切さを感じたり、曖昧だった知識を深めたりすることに効果があった。今後も治癒過程の理解をより深めるために、動画で作成するなどの教材研究が必要である。

また、ワークシートからは「自分で判断していくこと」に関連する記述も多く、保健学習の「けがの手当」や「応急処置」で学んだ初期判断や応急手当と創傷が順調に回復していかない時の判断と対処方法を結びつけることで、治癒過程の見通しを立てて判断していくことの重要性に気づくことができたのではないかと考えられる。その他、すり傷後や打撲後の部位を「まず水で洗う」「冷やすことが大切」といった記述が多くあったことから、応急手当の必要性が今まで以上に認識されたと言える。さらに応急手当や適切な対処をしていきたいという意欲につながっていたことから、保健学習の知識と自分の生活目標へとつなげていくことが重要である。

授業全体を通しては、一時間の授業で指導する内容としては時間的に難しいこと、学級や個人によっては治癒過程の認識に差が見られたこと、授業前に「自分で判断や手当ができそうだ」と感じていたことが治癒過程を学んだ後には慎重になる子どもがいたことは、今後の検討課題である。

以上のような課題は残ったものの、創傷の治癒過程について見通しをもち主体的に学ぶ保健指導の工夫は、自ら適切に判断できる力を育てることにつながる可能性が見出された。

最後に、本研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただいた先生方、また、研究をご支援していただいた研究員所属校の校長先生ならびに教職員の皆様に心から感謝申し上げます。特に検証授業の実施では、川崎市立坂戸小学校教諭 丸山 美香子先生、川崎市立下布田小学校教諭 鈴木 こずえ先生、川崎市立長沢中学校教諭 前田 寛之先生にご協力をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

また、創傷の治癒過程に関する教材「皮下出血における治癒過程イラスト」の作成に当たり、ご助言とご支援をいただいた川崎市立坂戸小学校内科学校医 たかぎ内科クリニック院長 高木 淳彦先生に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

- | | | |
|--------|---|--------|
| 鈴木 篤 | 『けが・病気・からだの本 ①けがの巻』さ・え・ら書房 | 1996 年 |
| 藤森 弘 | 『からだをまもるしくみ』 偕成社 | 1996 年 |
| 矢島 幸仁 | 「生体における皮下出血色調変化の測色学的評価」東北大学大学院医学系研究科
社会医学講法医学分野 博士論文 | 2004 年 |
| 具志堅 綾子 | 「体の科学的な健康認識を育てる保健学習の工夫～ 第 5 学年「けがの防止」を通して～」 那覇市教育研究所研究員報告 | 2005 年 |

【指導助言者】

聖心女子大学教授（川崎市総合教育センター専門員）

植田 誠治